



TITLE:

<和文エッセイ>村上春樹とイタリア -- 『遠い太鼓』 ローマ編・『ノルウェイの森』 誕生の地探訪記--

AUTHOR(S):

山崎, 眞紀子

CITATION:

山崎, 眞紀子. <和文エッセイ>村上春樹とイタリア -- 『遠い太鼓』 ローマ編・『ノルウェイの森』 誕生の地探訪記-. MURAKAMI REVIEW 2018, 0: 107-117

ISSUE DATE:

2018-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/243783>

RIGHT:

村上春樹とイタリア
—『遠い太鼓』 ローマ編・『ノルウェイの森』誕生の地探訪記—

山崎 眞紀子
(日本大学)

Rome in *A Distant Drum* by Haruki Murakami

Makiko Yamasaki
(Nihon University)

村上春樹とイタリア、このタイトルでのアプローチは以前から考察してみたいテーマだった。それは、今からおおよそ 30 年前に刊行された村上春樹初の紀行文『遠い太鼓』（講談社、1990 年 6 月）のインパクトが強かったからだろう。刊行されたばかりの帯には「待望の書き下ろし長篇エッセイ、1986 年秋—1989 年秋、ギリシャ・イタリアに旅しながら『ノルウェイの森』を書き上げた三年間を綴る、全く新しいタイプの旅行記」と記されている。当時は斬新な旅行記として目を奪われたが、現在読み返してみると 1987 年 9 月 10 日刊行『ノルウェイの森』執筆過程がわかる貴重な資料旅行記としても読める。

特に注目すべきはローマ編である。『ノルウェイの森』第一稿を書き上げた瞬間の 1987 年 3 月 7 日土曜日の朝に「この日は朝の五時半に起きて、庭を軽く走り、それから休みなしに十七時間書き続けた。真夜中前に小説は完成した。日記を見るとさすがに疲れていたようで、ひとこと『すごく良い』と書いてあるだけだ。」(209 頁)と記述されていることは興味深い。「すごく良い」と著者に言わしめた作品を誕生させた当時のローマのレジデンス、やはり一度は訪れたいものだ。

筆者は 2018 年 9 月の初め、ローマ出身の村上春樹研究者でフィレンツェ大学日本語講師のクチネッリ・ディエゴさん（欧文スペルは Diego Cucinelli—本人の希望でカタカナ表記は、日本風に姓名順とした）の協力を得て『ノルウェイの森』を誕生させたレジデンスを探訪した。室内こそ入れなかったものの、許可をもらって建物内に入ることができたことは幸いであった。屋上に上がると、「僕」が突撃隊からもらったインスタント・コーヒーの瓶の中に入っていた蜚を放つシーンが幻視された。以下にその探訪記を記していこう。以下（ ）内の数字は上述の『遠い太鼓』からの引用頁をさす。また写真はすべて筆者の撮影による。

1. ヒントは「トレコリ」

晩夏のローマは連日快晴で気温も高かった。ローマ観光のガイドブックの扉写真を飾ることが多い白亜の殿堂、ベネチア広場にあるヴィットリオ・エマヌエル二世記念堂を背にして（写真右上）、その正面に続くコルソ通りをま



っすぐ進んだ先にあるポポロ広場（前頁写真下）に朝 9 時、クチネッリさんと待ち合わせした。ポポロ広場からテベレ川を渡り少し左手に行くと、カプール広場（写真右 1 枚目）があり、そこにあるカフェで村上春樹はエスプレッソを飲みながら物思いにふけるシーンが『遠い太鼓』には記されている（本探訪記の最後に掲載）。カプール広場は歴史ある建築物の旧裁判所前にある広場で、品がよくゆったりとしてとても美しい広場である。村上春樹のセレクトは、いつもどこことなく上品な場所が選ばれる。



まず、レジデンスの名前「Villa Tre Colli」（トレコリ）から検索した住所 Via Guerrazzi, 103-Monterotondo, Roma に向けて出発することになった。同行のクチネッリさん曰く、どうやら現在そこは結婚式場になっているらしい。交通機関もなさそうなので車で向かう。10 分も走らないうちにすでに都心から離れた田園地帯の景色が広がり、車はやがて坂道を登り始め、徐々に道路も細くなっていく。出発して 25 分、ずいぶんローマ中心部から離れてしまった感覚がある。山の頂上のような遥か下界を見下ろす高台にある「Villa Tre Colli」にようやくたどり着いた。しかし、門扉が閉まっていて中が見えない。せっかくここまで来て...と、ひどく落胆していたら、幸いなことに後続車ドライバーが降りてきた。事情を話すと、紺のポロシャツを着た 40 代半ばぐらいのすらりとしたそのドライバーは、門扉をあけて中へと導いてくれた。彼は Villa Tre Colli のオーナーであった。はるか遠くを見渡せ、素晴らしく美しい景色を見下ろす位置にあるヴィラ・トレコリは、プールもあり、結婚式場として抜群のロケーションではある。だが、そこはオーナーの住居と披露宴を開けるパーティ会場があるだけで、賃貸マンションではなさそうである。ローマの中心地から遠く離れているし、田園地帯だし、村上春樹が住んでいた住居とは到底思えない。（写真右上 2、3 枚目）



出発時にクチネッリさんと打ち合わせしたときは、いまは結婚式場に使用されているけれども、かつてはレジデンスだったのではないかと推測して赴いたのだが、オーナーに聞いてみると、これまで人に貸す住居だったことはなく、「Villa Tre Colli」はこの地域の呼び名として古くから使われており、彼で 3 代目であるとのこと。どうやら見当はずれであったようだ。確かに、ローマ郊外であることは間違いなが、中心地までバスで 10 分というところが異なっている。ローマ中心地から車を走らせて 25 分、また、この高い丘に上がってくるバス路線は見当たらない。

『遠い太鼓』には、『ノルウェイの森』を誕生させたローマ郊外のレジデンスの描写は以下のようにある（長い引用は字体を変えて表記）。

僕は友人に手伝ってもらって、ローマ郊外に〈ヴィラ・トレコリ〉という家具つきのレジデンス・ホテルを見つける。郊外といっても都心からバスで十分かそこらのところである。それほど広い部屋ではない。居間とベッドルームと小さなキッチンとバスルーム。（中略）

〈ヴィラ・トレコリ〉はその名前の示すとおり古いヴィラ（邸宅）をホテルに改造したもので、なかなか立派な広い庭がついている。そしてまた丘の上にあるから（トレコリというのは「三つの丘」という意味である）見晴らしはとても良い。ローマの街が一望に見わたせる。部屋の窓からは、外務省とテヴェレ河とサッカー場のあるファロ・オリンピコが見える。サッカーの試合のある日には、ウォオオオオオというときの声のような歓声が湧きあがってくる。そしてその上空には煙草の紫色の煙がもうもうと立ちこめる。初めてそれを見たときには世界に何か大きな異変がおこったのかと思ったくらいだった。

冬の終わりから春の始めにかけてのローマの風景はとても印象的なものだった。ローマの街はまるで子供がむずかっているように、体にまとわりついた冬をふりはらおうとしていた。それは他のどんな季節のローマの風景とも違っていた。不思議な形をした雲が空をすごい勢いで流されていったり、丘の麓を蛇行して流れるテヴェレ河がふと奇妙な色に輝いたりした。僕は窓に向けて机を置いて、仕事に疲れると、そんな光景をぼんやりと眺めた。僕自身の体も、文章を紡ぎ出すべく、ローマの街とおなじようにむずかっていたのだ。（略）

しかし、そういう素晴らしい見晴らしや庭の趣に比べると、建物の方はそれほど立派とも言いがたかった。はっきり言ってかなりがたがきているし、その設備はいささかお粗末である。（略）こういう古い屋敷をきちんと保持するために必要な補修がなされていないのである。話によればここはしょっちゅうマネージメントが代わっていて、そのせいで管理があまりよくないのだということであった。（207～209）

この記述に対応するものが1つとしてない。やはり、見当外れだったか…。私が落胆していると、クチネッリさんは、実はもう一つの候補がありますと言う。気を取り直してそこに向かうことにする。車は坂を下りてしばらく街中を走り、15分ほどでもう一つの〈ヴィラ・トレコリ〉に到着した。ここは街の中であり、中心部に行くバス路線もありそうだ。住所は、Via della Camilluccia 180, Roma。入り口の門扉には「Villa Tre Colli」と記されている（写真右の3枚）。門扉は開いていて広い庭が続き、80メートルぐらい先にレジデンスのフロントがある。そのフロントにいる管理人男性に聞くと、ここはかつて大学の寮だったこともあるが、何度もオーナーが変わり、昔のことは一切わからないとのこと。村上春樹がこのレジデンスにいたのは、もはや30年前の1987年である。そのころからすでに「しょっちゅうマネージメントが代わっていて」とあるので、村上春樹が住んでいたことがあることを知る関係者を探り当てることは不可能になった。

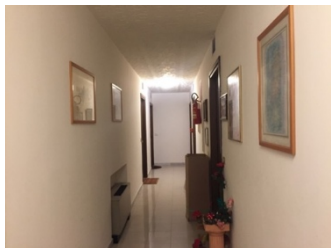


2. 井戸のあるトレコリ・レジデンス

住んでいたとの証言を得ることは不可能になったが、とりあえず周囲をぐるりと回ってみた。外見の建物は修復中である箇所もあり、老朽化している（下の写真2枚）。まだ修復が必要だろうと思われる箇所もそのままある。



しかし、庭は「なかなか立派な広い庭」と記述にある通り、噴水もあり、樹木や草花もバランス良く配置されて実に広くて贅沢な庭であるし（右の写真2枚）、手入れも行き届いている。やはりこのレジデンスではないかと思われてきた。もう一度フロントに戻り、クチネッリさんは日本のテレビ番組制作にも携わっている経験を生かし、日本の村上春樹という作家が此处に住んでいたかもしれないので、中に入って見てみたいと彼女は言っていると交渉してくれた。功を奏し管理人男性からの許諾を得て、レジデンスの中に入る。細い通路を奥まで進むとエレベーターがあり、その最上階に上がった。建物の外装は確かに「それほど立派とも言いがたかった。はっきり言ってかなりがたがきている」状態ではあるが、中はさほどひどい状態ではない。と言っても個々の室内には入れなかったのが（写真下の2枚）。



最上階にある5階のテラスからさらに階段を上ると屋上に出ることができた。屋上は、360度のパノラマビューであった。快晴だったこともあり、素晴らしく美しい眺めで、はるか遠くまで見渡せる（写真次頁の上2枚）。屋上から階下のベランダを見ると鉢植えが並んでいる。アパートの五階のヴェランダの手すりにあぶなっかしく並んだ鉢植え」（213）が、今でも



同じように置かれている（写真すぐ上の 2 枚）。30 年もの年月がぐっとこちら側に近づいて来た。屋上の風景から村上春樹の記述と対応させてみようとする、クチネッリさんが「あ、あれが外務省ですよ！ あの四角い建物がそうです。」と声を上げた。その建物の奥の方には、テヴェレ川が流れている（写真右 1 枚目）。3 月だったら今ほど緑が青々としていないので、もっとテヴェレ川がはっきりと見えるはずだとクチネッリさんはいう。「じゃあ、サッカー場は？」と結構な高さにあるその屋上から見渡すと、「あ、あれです！」と右手の方をクチネッリさんは指をさした。そこに視線を向けると、確かにスタジアムが見える（右の写真 2 枚目）。写真では伝わりにくいのであるが、肉眼では確かにサッカースタジアムが見える。間違いない、ここだ。このレジデンスで、あの『ノルウェイの森』を書いたんだ、そう思うとなかなか立ち去りがたくなってくる。しばらくして階下に降りて、念には念をということで、「郊外といっても都心からバスで十分かそこらのところである」（207）のか実際に確かめるために、このレジデンスからバスに乗ってみようと、



管理人男性に見学のお礼を述べてから立派な庭を通り出口に向かって歩き始めた。すると驚いたこ

とに右手に井戸があったのである（右の写真2枚、下の写真中央がレジデンスの受付であり、これを背に右手に、写真では左手に映っているのが井戸）。覗いてみると金網で蓋がされていて、長い間使用されていない様子だ。井戸は、『ノルウェイの森』冒頭で「僕」が直子と草原歩く場面で、直子が野井戸に気付かず落ちて「一人ぼっちでじわじわと死んでいく」、怖れるものとして出てくる。

そんな井戸が本当に存在したのかどうか、僕にはわからない。あるいはそれは彼女の中にしか存在しないイメージなり記号であったのかもしれない——あの暗い日々彼女がその頭の中で紡ぎ出した他の数多くの事物と同じように。（『ノルウェイの森』上巻、講談社、1987年9月、10頁）

ローマの街はあらゆるところに噴水を見かける。しかし、井戸は見かけたことがなかった。形状もなんとなくそのレジデンスにはそぐわない異質の感があり、目立つ。村上春樹と井戸の

関係は、もしかしたらローマにルーツがあるのかもしれない。まさか井戸があるとは思ってもよらなかったし、繰り返すがローマでは井戸は少ないとローマっ子のクチネッリさんも言う。

レジデンスを出て少し進むと、小さな広場に出た。タクシー乗り場やレストランやスーパーマーケット、銀行などがある。昼食時だったので、こじんまりとしたトラットリアでランチを摂る。地元の人々に愛されているような店らしく、味もなかなかである。食後のエスプレッソを頼むとデザートシュークリームがサービスでついてきた。その味も抜群であり、さらに会計であまりにリーズナブルなのに驚いた。トレコリレジデンスのある町は穏やかで閑静であり、物価も安く、ずいぶんと住みやすかったのではないだろうか。路線バスに乗ってみると、10分ぐらいで都心に出られた。記述に合う。やはり、間違いなさそうである。

3. 死とローマ—1987年3月18日 午前3:50

レジデンスを探し当てた嬉しさは格別なものだった。5階のあのあたりの部屋で、この景色に近いものを見ながら執筆したのだと思うと感慨無量であった。筆者がローマに滞在したのは10日間ほどだが、単なる観光客としてとどまってもローマは何日あっても足りないくらい見どころ満載の飽きない都市である。しかし、村上春樹はローマを過剰にほめてはいない。『遠い太鼓』に記述されているローマは、「死」のモチーフで語られている。村上春樹とローマ、そこには何が横たわっているのだろうか。

村上春樹は、その土地が持つ歴史性を捉えるのが巧みな作家である。たとえば北海道を舞台にした『羊をめぐる冒険』（講談社、1982年10月）は、わずか二週間ほどの取材で、明治期に国内植民地化されたに近い北海道の大地がいかに明治国家によって蹂躪され利用されたのかの歴史をつかみ、小説内でそれが重要なファクターとして展開している。いまだに北海道といえば、青い空



と白樺林に囲まれた緑の丘に羊が群がる風景イメージが流布されているが、その羊のもつ暗い闇に包まれた歴史性に注目した村上春樹の着眼点は、北海道の真髄についており、やはりたぐいまれな能力だと言える。明治期に日露戦争を前にして国策で無理やりに緬羊が北海道の畜産業者に押し付けられたが、気候の違いから緬羊畜産は採算が取れなかった。以降、廃業に追い込まれ、現在ある緬羊業者は独自の研究を重ねてかなりの辛苦を乗り越えて生計を立てている。

北海道美深町の松山農場の柳生佳樹さんは、羊は儲からないが、一度始めたら羊憑きのようにやめられなくなると言っていた。採算が取れにくいながらも羊は、何か不思議な力を持つものさうだ。ちなみに北海道名物のジンギスカン鍋の羊肉は、そのほとんどが輸入である。イメージと現実のギャップの問題を、『羊をめぐる冒険』では広告業の会社を営んでいた主人公を立てることであぶりだし、いっそう作品世界に奥行きと深みを与えた。

また、オリンピック取材記『シドニー！』（文芸春秋、2001年1月）も見事なまでに完成された文体で、シドニーという都市が持つ真面目さと空虚さを描き出している。周知のとおり、オーストラリアは大英帝国に忠誠を誓っていた時代がある。そのほか村上春樹が描く海外紀行の文章はドイツ、ハワイ、ギリシャ、トルコ、モンゴルなど枚挙にいとまがないが、それぞれその土地の持つ歴史をつかむのに長けている。果たして村上春樹の筆によるローマはどのように描かれているのだろうか。しかもローマは『ノルウェイの森』の誕生地として記念すべき地である。

流行の先端をゆくトップレベルのファッションがショーウインドウを飾るローマは、レストランでは何を食しても美味しく、ボルゲーゼ美術館を始め数多くある美術館には目を奪われる名画や彫像作品が所狭しと展示され、ヴェネチア広場やスペイン広場、トレビの泉などには観光客が常にあふれ、歴史ある美しい都市である。だが村上春樹は、この豊かな文化資源には筆を割かない。彼がローマに読み取ったのは、「死」である。

ローマの中心には西暦80年に完成されたと言われる、およそ2000年前の巨大なコロッセオ(円形闘技場)があり、古代ローマの民主政治の中心地、フォロ・ロマーノと呼ばれる元老院や神殿などの痕跡や建造物の一部がそのまま残されている。コロッセオは猛獣と剣闘士が、もしくは剣闘士と剣闘士がどちらかが死ぬまで戦い抜く壮絶な闘技場である。流された血は、その大地が吸い取り、ローマを成立させている(前頁の写真1枚、右の写真4枚)。



コロッセオからさらに南西に向かって上がっていくとアヴェンティーノの丘がある。この丘からはローマの素晴らしいパノラマビューが堪能できる（写真右 1、2 枚目。1 枚目は、アヴェンティーノの丘から望むヴィットリオ・エマヌエルⅡ世記念堂。2 枚目は、アヴェンティーノの丘から望むテヴェレ川）。

そのほど近いところにマルタ騎士団広場がある。この騎士団は、負傷者の看護を目的として第一回の十字軍遠征の際に組織された長い歴史を持つ修道会で、この広場に騎士団長の館があり、その館の重厚な扉の中央には鍵穴があつて、その穴から覗くとバチカン市国の聖ピエトロ大聖堂が望遠鏡の先に映し出されるように小さく美しく見える（写真右 3 枚目はマルタ騎士団長広場。4 枚目はマルタ騎士団長の館。次頁上段の写真右はその館の前の行列。入口扉の鍵穴から覗くと、聖ピエトロ大聖堂が次頁上段の写真左のように見える）。短編『加納クレタ』（TVピープル』文芸春秋、1990 年 1 月所収）に登場する加納マルタや『騎士団長殺し』（新潮社、2017 年 2 月）を彷彿とさせるこの名前に引き付けられてマルタ騎士団長広場を訪れた筆者も、長蛇の列に並んで鍵穴から聖ピエトロ寺院を覗いた。免色がまりえの姿を望遠鏡で覗いていたように。意外にもバチカン市国にある偉大なる大聖堂はくっきりと見えた。

古代ローマ、中世の館、そして 21 世紀の現代、ローマは 2000 年もの時間がそのまま共存する実に不思議な都市である。そんな多面的なローマを村上春樹は「ローマは無数の死を吸い込んだ都市だ。ローマにはあらゆる時代の、あらゆるスタイルの死が満ち満ちている。カエサル之死から、健闘士の死まで。英雄之死から、殉教者の死まで。」（217～218）とローマを「死」



で捉えた。確かにローマは、日本で言えば村上春樹の出生地である京都にあたるのかもしれないが、血が流れ、死屍累々が地面の下に埋まっている土地なのだろう。『遠い太鼓』には『ノルウェイの森』を仕上げる過程において、強く死を意識させられているさまが描出されている。



『遠い太鼓』「ローマ」章の「午前三時五十分の死」節にあるのは、夥しいまでの死の匂いである。悪夢を見て午前三時五十分にトレコリ・レジデンスで目が覚めた村上春樹の夢は、かなりリアルなものだったようだ。頭部と胴体が切り離されている 500 頭もの牛の死骸、しかも切り取られてから時間を置かない状態で血が流れ続け、その血はその室内の外にある海へと流れ込んでいる。海は血の色に染まっている。窓の外には死肉の肉片を求め多数の鷗が空を飛び、牛は「僕」を見ながら「マダ死ンデナイ」といい、鷗たちは「モウ死ヌヨ」と言っている、といった悪夢だった。「長い小説を書いているとき、僕はいつも頭のどこかで死について考えている」（211）という村上は、まさに小説の完成を間近にして深く心の淵に降り立ったのであろう。

結びに変えて

小説で何を描くのか。古代ローマの建造物が現代都市の中に共存しているローマは、かつての時間を私たちに想像させ、今ここにいる私たちは悠久の古と繋がっている存在であることを気づかせられる。無数の人間の死を見てきたことを耳元でささやかれ続けられるかのような都市に、異国からの慣れない旅人が数年間居を構え、ある若き女性の死を扱った小説を執筆した。ローマを「死」と結び付けた村上春樹の慧眼は『ノルウェイの森』に結実された。人間の命は無限ではなく、いつか必ず終わりが来る。その終わり方をじっくり小説という物語で読むことは、忙しい日々を送る中で一種の祈りに近い行いであろう。ローマはカトリックの総本山、バチカン市国がある。日本は無宗教とは言えども、度重なる自然災害による不意の落命に対しては、祈ることしかかならずばはない。

このあと、村上春樹はローマの住居を 1987 年 9 月ごろに郊外の高級住宅地にある一軒家に住み替え 10 か月過ごしたが、この住居が北側で日が差さず寒かったためにバチカン市国近くのステファノ・ポルカリ通り沿いのレジデンスに 1988 年 8 月ごろに転居している。その住まいも筆者は取材に行ったので、写真のみ掲載しておく。ステフ



ァノ・ポルカリ通りは非常に短い通りなので、この通りを目印にしていけば、容易に見つかる。前頁の川の写真は、ローマの街を流れるテヴェレ川。『遠い太鼓』ではテヴェレ河と表記されている。川の下の写真は、「古いパラッツォ風の、なかなか雰囲気のある建物で、大きな門と前庭がついている。静かで日当たりもよさそうである」

(360)と記述されているレジデンス正面から撮影したもの。右の写真1枚目は、レジデンス前庭。2枚目はレジデンスの入り口で、正面右手角を回った側面にある。普段は、入り口扉は締まっている。写真3枚目の、白い車の下に見える四角い窓が地下室の部屋の窓。最初にこのレジデンスに村上春樹が住んでいたのは地下室。1階の部屋に移れたのは、1989年2月ごろと思われる。ローマはこういう半地下部屋をよく見かける。そして路上駐車が多い。

この訪問記は、『ノルウェイの森』執筆の資料として受け止めていただければ幸いであるが、村上春樹がローマでつかんだものは、人の命の終わりをどう描くかにあったのではないかと思う。2000年もの時間がローマにいて感じ取れる。貴重な滞在だったのだと『遠い太鼓』を振り返って改めて思った。結びに変えて、村上春樹がローマでつかんだ「死」の感触を、『ノルウェイの森』執筆時の『遠い太鼓』からの引用と、今は亡き河合隼雄との対談の言葉を紹介することで締めくくりたい。

ピアッツァ・カブールに面したカフェに座ってエスプレッソを飲み、まわりの風景を眺めながら、僕はふと不思議な気持ちになる。僕はこう思う。今ここを歩いている人々は、百年後にはもう誰一人として存在してはいないのだ、と。前を歩いて通り過ぎていく若い女も、バスに乗ろうとしている小学生も、映画館の看板をじっと見ている若者も、そしてこの僕も、おそらくみんな百年後にはただの塵になってしまっているのだ。百年後にも今と同じ光がこの街を照らし、今と同じ風がこの舗道を渡っていることだろう。でもここにいる誰一人として、もはやこの地表には存在していないのだ。(213)

朝が訪れる前のこの小さな時刻に、僕はそのような死のかたまりを感じる。死のかたまりが遠い海鳴りのように、僕の身体を震わせるのだ。長い小説を書いていると、よくそういうことが起こる。僕は小説を書くことによって、少しずつ生の深みへと降りていく。小さな梯子をつたって、僕は一步、また一步と下降していく。でもそのようにして生の中心に近づけば近づくほど、僕ははっきりと覚えることになる。そのほんのわずかな先の暗闇の中で、死もまた同時に激しいかたまりを見せていることを。(218)

以下は『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』(岩波書店、1996年12月)からの引用である。

村上 ぼくは小説を書いている、ふだんは思わないですけども、死者の力を非常によく感じることがあるんです。小説を書くというのは、黄泉国へ行くという感覚に非常に近い感じがする



のです。それは、ある意味では自分の死というのを先取りするということかもしれないと、小説を書いていてふと感じることがあるのですね。

河合 人間はいろいろに病んでいるわけですが、そのいちばん根本にあるのは人間は死ぬということです。おそらくほかの動物は知らないと思うのだけれど、人間だけは自分が死ぬということを、自分の人生観の中に取り入れて生きていかなければならない。それはある意味では病んでいるのですね。

そういうことを忘れている人は、あたかも病んでいないかのごとく生きているのだけれども、ほんとうを言うと、それはずっと課題なわけでしょう。

だから、いろいろ方法はあるのだけれど、死後に行くはずのところを調べるなんてのはすごくいい方法ですね。だから、黄泉国へ行って、それを見てくるということを何度もやっていると、やがて自分もどこへ行ったらいいかとか、どう行くのかということがわかってくるでしょう。

現代というか、近代は、死ぬということをはるべく考えないで生きることにもものすごく集中した、非常に珍しい時代ですね。（同 163～164 頁）